



若手教員の授業力と生徒指導力

を高める研修と組織体制

～新潟県の教員等育成指標をもとにした若手教員の育成～

南魚沼市教頭会 南魚沼市立おおまき小学校 五十嵐 啓滋

1 課 題

当県には教員獲得困難地域に指定されている地域が数か所あり、本校所在の南魚沼市もこれにあたる。このような地域の傾向として若手が多い傾向があり、当市の場合全体の職員の44%程度が採用6年目までとなっている。

若手教員は数年で都市部へ異動し、新規に若手が配置され、継続的に若手教員の占める割合が高い地域となっている。そのため、当地域では各校・教頭会にとって、若手教員の育成が学校運営の喫緊の課題となっている。

本研究は南魚沼市の教頭会として共有した課題解決の方策の一つとして実践したものである。新潟県の教員等育成指標をもとにした若手教員への授業研修や、生徒指導でのOJT研修で若手教員の専門性を高める組織体制は、中堅・ベテラン教員の育成にもつながるのではないかと考えた。

各校の取組や当校の研究成果を教頭会を通して市内の学校間で共有し、自校の実態に合わせて実施していくことで、市全体で教員の専門性を育成することができると考えた。

2 課題解決の取組

当校は各学年1学級、特別支援学級3学級であり、通常級担任の構成は初任者1名、2年目1名、3年目1名、30代1名、40代1名、50代1名となっている。

新潟県の教員等育成指標に基づく若手教員育成過程を通して、中堅・ベテランの専門性も更に高められるようにしたいと考え実践した。

(1) 学習指導において育成指標に近づくようにするための方策

県育成指標に従って、本校が特に重視したのは以下の2点である。「学習指導要領の目標と内容に沿って児童生徒の実態に合った授業を行うことの重要性を理解している」及び「板書や発問等の基本的技術を身に付けるとともに、児童の考えを引き出す課題を設定しようとしている」である。教頭として、指標達成のためのPDCAサイクルを行う組織体制を整え、教員個人へのフィードバックを行った。具体的には以下の2点である。

第1に、PDCAサイクルのための組織体制として、研究主任が研究推進委員会を定期的で開催するよう校内体制を整えた。構成メンバーで授業等を検討し、公開授業を行い、協議会で成果と課題を確認し次に活かしていくものである。教頭として授業参観後は、指標を基にしたフィードバックを行い、若手教員の取組みを激励した。これにより、若手教員育成の方向性が大きくぶれることなく、教員個々人の成長段階に応じた授業が展開されることとなった。

第2に、中堅・ベテラン教員の育成システムへの組み込み、指導・助言のシステムを構築した。中堅教諭及びベテラン教諭が率先して授業公開をし、若手教員にとって指標の具体的なイメージをもっても

らった。若手教員のモデルになっているという価値付けを行い、リーダーとして一層の成長を促せた。さらに、外部の指導者に定期的に若手教員の指導を依頼したり、他校の授業参観ができるように、中学校区内の相互授業参観のシステムを構築したりした。これにより、若手教員は授業がイメージしやすくなり、多くのよい授業に触れることで、授業のスキルアップにも繋がった。

(2) 生徒指導においてチームで対応することで育成指標に近づける方策

本校では県育成指標に従って、若手教員には「いじめ対応、心のケア等、学校事故の未然防止と安全配慮義務について理解し、迅速且つ組織的に対応する」及び「児童生徒一人一人の実態に沿った指導の重要性を理解する」の2点の育成を図った。また、中堅・ベテラン教員には「生徒指導を組織的・計画的に行うための長期的な見通しをもち、教職員に対して指導・助言をする」について育成を図った。

困難課題対応的の生徒指導を進めていくには、目指す児童像や指導の考え方を共有し、全校的な指導体制を構築することが必要である。そのために、以下の2点を大切にし、実践した。

1つ目は生徒指導体制の構築である。年度当初に生徒指導部が生徒指導マニュアルで全教員の共通理解を図り、生徒指導の方針・基準を明確化した。その上で対応的な生徒指導事案が起きた際に、若手教員と中堅・ベテラン教員がチームで対応することとし、どの場面で誰が対応するか等の校内連携体制を整えた。こうした体制の下、若手教員はマニュアルだけでは難しい生徒指導の対応をOJTで学ぶことができた。また、中堅・ベテランにとっても若手に助言・指導を行ったり、生徒指導の対応をモデルとして見せたりするため、能力の向上を図ることができた。教頭として生徒指導主任等関わる職員を集め相談する場を設定したり、校長への報告相談、最終的にどのように解決したか確認したりした。

2つ目は、予防的な取組である。年間を通して組織的な取組ができるように、生徒指導部に「月の生活目標の設定・振り返り」「定期的な児童の情報交換の会」「WEBQUによる学級の状況や児童理解」を行うよう指示し、よりよい学級経営が行えるようにした。

3 成果と今後の課題

(1) 成果

学校評価の項目で、「国語・算数が分かる」・「クラスで困っていることはあるか」について子ども達の自己評価の変容（1から2学期）を調べた結果、数値的に児童の学習・生活の満足感は向上している。

	若手	若手	若手	ベテラン	中堅	ベテラン
国語	78→88	95→95	88→100	90→95	92→88	84→91
算数	94→100	86→90	88→94	71→90	92→72	91→91

	若手	若手	若手	ベテラン	中堅	ベテラン
ない	78→88	86→72	64→82	61→85	76→100	95→91

また、当校の若手教員に学習指導と生徒指導について聞いてみたところ、「型を覚えるのは最初は大変だったが覚えると授業の内容を考えるのに力を入れられるので、とてもよかった。」「授業を公開する機会が多いのは大変だったが、自分でも少しずつ上手くいくようになっていのが分かってよかった。」「トラブルの解決の過程がよく分かった。」など肯定的な感想だった。

(2) 課題

現在は、南魚沼市教頭会で成果と課題を共有しているところである。今後は、各校のよい取組を各校で取り入れ、教頭会として若手育成に重点を置いて実践を続けていく。

○ 協議してほしいこと

- ・若手教員の教師としての能力の向上に関わる組織的な取組